

# 犀星文芸の母胎たる句作について

—犀星文学における句作の意義—

劉 金 拳

**Haiku—The Matrix of Murou Saisei's Literature**  
—The Significance of Murou Saisei's Literature—

**LIU Jinju**

## **Abstract**

Long tortured by inferiority complex, Murou Saisei, has been seeking comfort for soul from the company of Nature, his closest friend, and expressing emotions through Haiku writing, which lays a foundation for his literary creation and forms his unique writing style. More importantly, Haiku writing helps him gain confidence, improves his aesthetic judgment, and guides his life.

**キーワード：**室生犀星、俳句、コンプレックス、脱出意欲、母胎

**Key words:** Murou Saisei, Haiku, complex, ambition, the matrix

## はじめに

「犀星は俳句にはじまり俳句に終わった人である」<sup>1)</sup>。しかも、「詩人である彼は当然詩作品が後世に残ることは信じてゐる。又彼の詩よりも一層微妙な発句が燦然としてある光芒を彼の背後に曳くことも信じて疑はない。(中略) その努力と精進の頂に立つところの彼は矢張り詩や発句の残る意味をもその小説作品の上に信じなければならなかった。」(「室生犀星論(自画像)」昭2.11)とあるように、室生犀星は、自分の詩作より句作により一層の自信を持っていて、それを「有難い美しい母胎」(「詩と俳句との中間」大5.10)として自分の文芸世界を孕んできたのである。本稿は、犀星の生涯・文芸における俳句の意義についての分析を通じて、彼のコンプレックス脱出の努力<sup>2)</sup>を窺うものである。

### 一、二重の意味における補償

古代から茶道、能楽などの遊芸の教養をずっと受け継ぎ、豊穡で耽美的な生活文化の雰囲気醸成した金沢は、もともと俳諧の盛んな土地柄であり、凡兆・北枝・千代女などの著名な俳人が輩出し、往昔の芭蕉も「奥の細道」の旅中訪問したところでもある。さらに近代になって明治三十年十一月に、雑誌『ホトトギス』を創刊した正岡子規と郷里を同じくした竹村秋竹を盟主として結成された北声会は、四十年近くにもわたって、金沢で活動を継続した。その後、子規門俊秀の直野碧玲瓏、北川洗耳洞、そして藤井紫影、松下紫人、大谷繞石などの推進で、月の会、北国俳壇が相次いで形成された。正岡子規ゆかりのこの風土と盛んな俳句結社は、当然として社会に大きな影響を与え、俳句はずっと高い人気を呼んでいた。例えば当時最も有力な地方紙『北國新聞』は、ほとんど毎日のように俳句を掲載し、多数の読者を持っていた。

この伝統と雰囲気が金沢生まれ育ちの犀星に俳句に関心を持たせたことは想像できるが、彼をして句作に夢中させ、その文学気質形成にかなりの影響を与えた最も根本的な原因は、物心ついた時より、ずっと劣等感コンプレックスに苛まれてきたゆえ、心を癒す手段として、犀星が自ら選んだ心理的補償のためだと思われる。幼い頃から俳句・短文・短歌などの創作に没頭したことを通じて、犀星は以下の二つの方面における補償を求めて、人生の船出を成し遂げたと思う。

#### 1. 不幸な境地から逃れるための救済＝「慰め補償」

不幸な出生と生い立ちにより、劣等感コンプレックスを負わされた犀星は、高等小学校を中退し、十三歳の時、給仕として裁判所に出されてしまった。が、社会に出たとは言え、「まるで無自覚な人間同士」、「無学な人間がより集まつて、血のつながりのない他人同士が植民地部落のやう」(「弄獅子」昭3.8)な家に帰れば、貰い子二人の給料を取り上げることにしか飲むの声をあげぬ養母に相変わらず虐げられるし、裁判所に出れば、引用が長くなるが、

「シンマイノ給仕サンカ」錐の先で揉みこんだやうにその言葉の屈辱の意味が、ドアのかけにゐる私の頭の中にひろがりだした。私は豫期はしてゐたもののこんなに露骨に自分の頭の中に卑屈さを感じたことは、まるでなかつた。子供にも子供の地位とか名譽とかがあるものなら、それはこの給仕サンと呼ばれた時にすつかり失くなつたも同様であつた。子供が子供の地位とか名譽を失したあとにそもそも何がのこり、何がふたたびその名譽の代りになるものを取り容れることができるだらうか。學問も智慧もないやうな子供はさういふところから、すでに、自分の心に与へられた意地わるさを別の意味で次第に募らせることによつて、彼の病まじげな生活がははじめかけるのであつた。(『泥雀の歌』昭17.5)

と、身の回りの人に見下された犀星は、感情的にコンプレックスのどん底に陥ってしまったということは、ここから窺えるのである。

では、こんな境地にいた孤独な少年は、どのように心の慰めを求めたのか。

素直さを失つた子供といふものは人間よりも余計に樹木や動物に心を寄せる者であつた(中略)貧家の子供であつて絶えず苛められ悲観してゐる者は、何時の間にか自然に近づいて行く中にはひり込んでゐるものである(中略)たとへば私は過酷な母から叱責されて庭に出たとする。そして白く乾いた砂の上に何者が這ひ、何事かを生活しようとしつつあるか、そしてその可憐な何者かが悲しみを紛らせようとする小さい人間の心に、全きまでに紛らせる能力を見せてゐたのである。(前出「弄獅子」)

私は庭のことも書いて置かなければならぬ。私は庭のなかで大抵のものを学んだからである。僅か四十坪くらいしかなかったが私の生涯にこのくらい私を動かし心に嵌めり込んでいる庭はない(中略)大抵の生きものも此処で生ける姿を見、大抵の樹木も此処でどういふふう生きていたかを私は知っていた。殊に季節季節の日の色、その暖かさもそれぞれに分類されながら春夏秋冬の日光を私の心に広げてみせていた。(『作家の手記』昭13.9)と、この「素直さを失つた」「貧家の子供で」、「愛し愛されるべき肉親を持たず周囲の人間への不信と反感だけをつのらせていた少年にとっては、過酷な環境の中で自然のみが心の慰めであり支えでもあつた」<sup>3</sup>。そこで、彼は、心を慰めてくれる唯一の存在として自然を見つけ、それに耽溺し、小さい動物たちを友とし、あるいは植物の表す四季の微妙な変化に驚きや喜びを発見しつつ過ごしていた。

が、自然に接して湧き出た強烈な感動は、捌け口が必要になる。

句の本質は、私たちの日常生活を豊かに実感することにあるのだと思います。季語やことばの新しい価値を発見しながら、めぐる季節の美しさを確認するとともに、日常のなかに隠れている多様ですばらしい表情と出会っていく(中略)ことばによる日常のデザインもしくは再構築、ことばを通じた日常のデザインもしくは再構築、といった言い方も可能かもしれません。<sup>4</sup>

と指摘されたように、俳句は、日本では「日常生活を豊かに実感」し、「季節の美しさを確認する」道具だとされている。「俳句といふものが當時少年であつた私の心持を非常に完全にあらはすことができた」(『草の上にて』昭11.2)というのは、句作を通して感情的支えを求めようとする、いわば心に渦巻いていたコンプレックスの出口として句作を選んだ犀星の情動的自

白である。つまり、自然現象と季節の移り変わりを見つめ、「ふたたびその名譽の代りになるものを取り容れ」ようとするこの「なにももたぬ学歴のない貧しい少年はインサイダーになるために俳句にしがみつ」<sup>5</sup>き、「日常のデザインもしくは再構築」をしようとしたわけである。そこで、彼にとって、「俳句も決していわゆる俳人趣味的なものではなく、少年の多情多感な心意を内面的に表現するみちであった」<sup>6</sup>。

句作を始めてから、彼は同じく裁判所の給仕をしていた義兄とともに、金沢に住んでいた芭蕉庵十逸に発句の添削を乞うようになった。「十逸さんは宗匠だつた。併しどういふ発句を見て貰つたか能く覚へてゐない。只、十逸さんは宗匠らしい貧乏な併し風雅な暮らしをしてゐたやうに記憶してゐる。」（「魚眠洞発句集・序文」昭4.4）とあるように、俳句が詩人犀星の「有難い美しい母胎」になったのは、十逸の添削からではなかった。犀星の文学生涯に大きな刺激となったのは、職場で俳句の師に恵まれたことである。ある意味で、裁判所は犀星の大学であった。自伝小説に挙げられているだけでも、会計課には薄田泣菫の詩集を愛読する平田という男、検事局には監督書記をしていて当時金沢俳壇で活躍していた川越弥一（号は風骨）、同じく能筆家の俳人赤倉錦風、その下役には日本画のうまい広瀬なる男、登記掛には文章家の葛巻桂花がいて、これらの人達は、年少の給仕の俳句や文章の添削をしてくれた。職場での見よう見真似を通じて、犀星は俳句という表現手段を知った。中でも「自分の発句道を徐ろに開眼させて呉れたのも、その道に熱烈だつた河越氏に負ふところが多い」とあるように、犀星にとって「生涯に師と呼ぶに適はしい殆ど唯一の人」（前出「魚眠洞発句集・序文」）は風骨であった。少年犀星は彼のもとで四年間作句し、添削を受け、読書の日を重ねて、僅かに自分の生きるべき道を見出した。その意味で「犀星の文学への第一歩が川越風骨に導かれた俳句の世界であった」<sup>7</sup>。その後、犀星は碧梧桐の提唱した新傾向俳句に影響され、それへの試みをし、松下紫人、北川洗耳に作句を添削してもらったことがある。多くの大家の指導のもとで、犀星の句作は日増しに上達した。

さらに、俳句に打ち込んだ結果、「何を見てもこれは俳句にならないだらうかといふ見方をするやうになり、風物草木の一切が実際これまでよりも興味深くちかに心に触れてくるのであつた」（「幼年の俳句」昭2.5）、「俳句をかけたために植物や動物を観察することが非常に微細に心をはたらかしてくれた。ことに天候などのうつりかはりが、ふしぎに俳句をやつてからうまくかけるようにな」（前出「草の上にて」）り、犀星は自然への新しい観察眼を持ち、自然への愛を孕み、そして開いてくれる自然にさらに深く入りこむことができた。犀星文学における数多くの「魚」作品と「虫」作品の存在は、この自然観察によったものである。

## 2. 句作による市民権の入手＝「派生補償」

義母のもとで虐げられ、学校でも教師から劣等生と見なされて疎外され、高等小学中退後は裁判所の「給仕」という「屈辱的な名称」（「私の履歴書」）に悩みながら、自己の存在を主張すべく懸命に俳句の創作に励む——これが犀星の少年期のすべてであった。<sup>8</sup>

との指摘通り、犀星が俳句創作に励むのは、はじめは慰め補償、即ち心を慰めてくれる自然に深入りして心理的救済を求めたためだった。が、俳句が特別な地位を占める土地柄の金沢では、

句会場で高い点をとれば、社会的に注目され、ないしは尊敬されることを実感するようになるにつれて、人に軽蔑され自分の存在に大きな不安を感じた少年室生照道は、やがて句作により市民権を入手し、溜まってきたコンプレックスを一時発散できる、言い換えれば「派生補償」を求めることができると分かり、孤独の中でも全力をあげて向かうべき対象として、俳句という文学の一形式にすぎりつくことでようやく自分を取り戻そうとしたのである。

当時『北國新聞』の俳句欄の選者をしていた第四高等学校教授藤井紫影を囲む月例の句会には松下紫人、四高教授の大谷繞石らの錚々たる俳人がいた。まだ十代の最年少者で、高等小学校を中退した裁判所給仕の犀星は、その句会に加えてもらい、俳壇で高く評価されていた。

明治三十九年十一月二十八日の『北國新聞』に「すゐ生」による「俳人風聞記(上)」という記事があり、中には、「犀星は文壇の一寵児勇氣と熱心とは転た感ずるに余あれど修養時代が大事であるから大通りを真直に突抜ける覚悟を固めて欲しい。」という、大いなる賛辞があるし、明治四十一年四月四日、五日の両日にわたる『北陸新聞』の「ふみ」なる筆者の「青年歌人を評す」にも、「室生犀星 この方の最も得意なのは俳句でせう(中略)そして又新体詩もおつくりになります。中中の才人です。」という高い評価もある。とりわけ当時新聞の俳壇で犀星と同じく最年少者で注目を浴びていた師範学校給仕吹本鋏汀子と犀星の二人に、鋏汀子の師匠で北国俳壇に新風を送った一方の雄である洗耳洞は、明治四十一年四月十八日の『北國新聞』文芸欄で、

我俳壇には是迄年少の俳友が居なかつたが此頃頼もしい若手が二人できた。一は犀星子、一は鋏汀子である(中略)この二子が当時我俳壇の貧乏神といふ位置に居るが、老ひほれた三役や横綱は唯一ト突きに刎ねとばさる様になるのも遠からぬことと思ふ。実に東西恰好な貧乏神を得たから一番角力をとつてもらつたのである。

と、二人に俳句合わせの形をとらせ、自ら角力の行司として判定を示すこともあった。このように犀星は俳句界期待の星とみなされていたのである。

俳風が流行っていた金沢という土地柄だけあって、地位の高い人、教養の高い名人に評価されたことは、犀星にとってどれほど名誉なことで、どれほど大きな刺激・激励となつたのだろうか。「室生犀星という御年十六歳の自称大詩人」という葛巻桂花が新聞に書いた紀行文(前出「泥雀の歌」より)から、犀星の得意ぶりが想像できる。

○そのうち私の俳句が新聞にのるやうになり、私の本名よりも雅号を呼ぶ人が多くなつていつた。(前出『泥雀の歌』)

○私は一度失つた例の名譽と地位とをどうやら少しづつ取り返すことができたやうな氣がした時分、傲慢さは全く言語道断なものだつた。何か書き何か讀んでゐるときに呼ばれても、氣にむかなければ立たなかつた。(同上)

○少年であつた私が、大人のなかに小さく挟まれて連座をしたことを考へて、私も大きくなつたものだ思ひ、謙遜といふことをそこで教へられたやうな氣がした。(前出「草の上にて」)

とあるように、「子供の地位とか名譽」を失って、手ぶらで大人の世界へ入場していかなければならなかつた犀星少年は、俳句で名声——たとえそれがたかだか地方の俳壇という狭い世界

であっても——を得ることを通じて、人並み、世間並みの自尊心をかりうじて回復できたのである。つまり「彼にとっては俳句の創作とはこれら出生や学歴や職業的身分等の負い目を周囲に向かって返し自己の存在を主張する唯一の手段であった」<sup>9</sup>。裁判所で本名ではなく雅号で呼んでほしいと望んだことは、まさにこの証拠である。しかも、俳句によって、犀星は市民権を入手して、身の回りの人と平等な立場に立ち、一時的にコンプレックスを薄めたばかりでなく、それはまた犀星を自己発見へと導くことになり、人間・社会とのかかわりを持つきっかけを心で体得させ、彼をして文学少年に生まれ変わらせた。

したがって、句作に励む犀星の努力は並大抵のものでは決してない。明治三十七年十月～十二月の三ヶ月に、『北國新聞』に照文という号で九句、三十八年に五句、三十九年に五十五句、四十年に『北國新聞』、『北陸新聞』その他二、三の雑誌を合わせると、百七十九句も、さらに四十一年に二百六十五句も出しているほど、毎日のように新聞に出す年もある。星野晃氏は、犀星の句作は、約千八百句あるとしている<sup>10</sup>。しかも中には傑作が多くある。『無鯨』（明41.9）は紫影選の「北國俳壇」からさらに二千数百句を抜粋されたものであるが、このうち弱冠十七、八歳の犀星の句が十五首も取られている。おまけに地方文壇に留まらず、中央の投稿誌『趣味』に、四十一年五・六月号に各一句取られているし、藤井紫影、それからその後任の大谷繞石が選にあたった『中央公論』の俳句欄に入選されたものも約四十句ある。犀星のこの並々ならぬ努力ぶりは、実は彼の劣等感コンプレックス脱出の意志の強烈さの現われである。例えば、

風邪引いて水涕にうき讀書哉（『北陸新聞』 明四十年十二月三十一日）

この句から、風邪にかかっても時を惜しんで読書に没頭していた犀星の姿が窺える。

歌に瘦せて眼鋭き蛙かな（紫影）

これは十七歳金沢の発句会で初めて紫影に会ったとき、扇に書いてもらったとされる句である。俳句を書くことによって、周りの人と平等な人間にならんとしとりつかれたように一所懸命に頑張っていて、句会に出たり次々と投句したりしていた犀星の姿をいきいきと活写したこの句は、犀星が後生大事にしてきたものである。

現実で満たされぬ心は句作、それから読書でしか慰められないがゆえに、犀星の読書ぶり、努力ぶりは人を瞠目させるものであった。明治四十三年上京まで「一軒の貸本屋の本を全部読みつくした」。裁判所で「本を読んで生意気になるやうではいかん。」（「私の履歴書」昭37）と忠告されたにも関わらず、ずっと読書を続けていた。それから、指導を乞うため有名な知識人のもとへもよく訪ねて行った。雨宝院の前にある徳龍寺の住職、石山智眠は文学好きで大変な読書家だと聞いて、犀星はそこへ日参したと伝えられている<sup>11</sup>。

ついでだが、後年彼が裁判所をやめて『みくに新聞』に入社した時の紹介者里見謹吾（幽巒）も、『石川新聞』入社時の紹介者松平柳孫も、上京後最初にすがりにした赤倉勇次も、いずれも俳句による知己である。彼の文学による出世コースは俳句なしには歩むことができないものであった。

## 二、犀星文芸の「有難い美しい母胎」

上記のように、犀星は句作によって文学開眼をし、俳壇の市民権、それから人間世界の市民

権を入手した。が、そればかりではなく、

○私がさういふ風に俳句を書いてゐるうち、植物や動物、それから季節の推移などを知ることができた。私の今の文章はそのところに既うよくこなされてゐたやうな氣がする。(前出「草の上にて」)

○詩に移つた僕の作品にも何時の間にか発句の表現を詩の中に溶かし込んで、発句の簡潔な細かい緊張した表はし方をするやうになつてゐた(中略)僕自身からいへば発句の方でみつちり覚え込んだ技法によつて詩作することが、可成りにてきばきした表現を盛ることができたので、僕は発句を詩の中に微塵にくだいて現はしてゐたのである。(「発句道の人々」昭9.3)

と、犀星本人が自覚して繰り返して述べたように、句作は、彼の詩作、それから散文創作に犀星流の特色を成り立たせ、犀星文芸の「有難い美しい母胎」となったのである。

犀星の句作と文学創作との関係を論ずるとき、彼の初期抒情詩と俳句とのつながりが普通まず取り上げられる<sup>12</sup>。犀星詩への俳句の影響に関する論考を中心に、奥野健男や原子郎は、初期犀星詩の頻出する「や」は、俳句における切れ字「や」からの影響だと指摘しているし、小室善弘は『文人俳句の世界』(本阿弥書店 1997)においてその二句一章に取り合わせる配合の詩法が「小景異情」に認められる点などを指摘し、「発句修行時代にたくわえた自然の微細なものに対する愛、四季の運行にともなう風物の微妙な表情へのいとおしみを拠りどころとして、それを自己の心情の氣息にかさね、流動させてうたうところにひらかれていったのが『抒情小曲集』の詩の世界であったのだ。」と、まとめている。「日本の多くの抒情詩が、たとえば藤村をはじめ、白秋、春夫などの抒情詩が短歌の発想であるのに対して、犀星のは珍しく俳句の発想である」<sup>13</sup> という指摘は、前掲の犀星本人の自覚にぴったり合っている。

が、実は初期の抒情詩に限らず、句作はずっと犀星の全詩作に影響していた。例えば後期の『動物詩集』収録詩の「大半は季語として俳句に詠まれる動物が取り上げられたのも、生活上のつながりとともに詩人の俳諧文学の知識、素養が題材の選択に影響を与えているものと推察される。」「『動物詩集』の表現上の特色は、要約すれば「俳句的表現」とでもいうべきものであろう」<sup>14</sup>。

それから詩作ばかりではなく、

僕が小説らしいものを書くやうになつてから、発句から割れて出た描写が文章をひきしめてゐることを感じ、やはり発句を作つたことの徒事でなかつたことを感じた(中略)只、それが人間のことを書く場合には著しい役割はつとめてくれないが、人事の雰囲気や自然現象及び都市街区の描写には常に細かい見方を教へてくれるのである。実さい、発句を嘗て作つてゐた作家の文章といふものはかつちりとひき緊まつてゐて、無駄が少なく、どこかに俳句のほひを漂はしてゐてこくがあるものだ。(前出「発句道の人々」)

と、犀星の小説創作も句作の影響なしにはできないものである。

思うに、より重要なのは、句作は彼に凝視の習慣と的確な表現力を与えたばかりではなく、彼の精神修練の具でもあったということである。句会という場で「謙遜といふことをそこで教へられたやうな氣がし」、「新鮮であるために常に古風でなければならぬ詩的精神を學び得たの

は、自分の生涯に此の發句道の外には見當たらぬのであらう」（前出「魚眠洞發句集・序」）という犀星の自己認識は、まさにそれを要約するものであらう。繊細な感性と限らない愛情をもって自然の微妙な美しさを歌うというのは、自然詩集としての『抒情小曲集』の大きな魅力の一つと認められている。それは明らかに句作によって涵養された美意識、培養された愛の成長である。従って「犀星少年にとって、俳句は文学であると同時に学問でもあったのであり、俳句は犀星のものの見方、考え方、そしてその表現に、根の部分で深くかかわっているように思われる」<sup>15</sup>。それはずっと犀星文芸の底流をなしている。

## おわりに

劣等感コンプレックスに苦しんでいた犀星は、「慰め補償」と「派生補償」を求めるため、抒情のほとばしりをまず俳句に向け、俳句によって文学開眼し、さらにそれを「母胎」にして、美意識を涵養し、文学創作の道を歩むようになった。ずっと彼の詩作・小説創作に底流していただけに、俳句は犀星の「文學的幼稚園」（「犀星發句集・序」昭11.6）、「文學的ふるさと」（前出「發句道の人々」）なのである。が、より重要なのは、俳句が彼をして心理的に自分も人並みの「人間」だと感じさせたことである。句作を通して、犀星は社会と人間哲学を学んで、自分の本当の意味の人生を歩むようになったわけである。俳句は、二重の意味において犀星のコンプレックス解消のための「補償」なのである。

## 参考文献

- 1 室生犀星著 室生朝子編『室生犀星句集 魚眠洞全句』北国出版社 昭52 あとがき
- 2 室生犀星の抱いたコンプレックスとそのコンプレックス脱出の努力などについては、詳しくは、一連の拙稿「コンプレックス脱出の犀星文学」『室生犀星研究』第22輯、「コンプレックス脱出の試み」（『室生犀星研究』第23輯）、「〈市井兎〉による中途半端なコンプレックス脱出」（『神戸女学院大学論集』第48巻第3号）、「〈コンプレックス〉から〈自己実現〉まで」（『室生犀星研究』第24輯）、「コンプレックスの解消」（『神戸女学院大学論集』第49巻第1号）、「コンプレックス脱出への持続的試み」（『室生犀星研究』第26輯）、「芥川と犀星との交友について」（『室生犀星研究』第27輯）、「犀星の詩から小説への転身に見る立身出世主義」（『室生犀星研究』第28輯）、「犀星における娼婦愛」（『室生犀星研究』第30輯）「犀星文学における〈死の体験〉の働き」（『室生犀星研究』第31輯）「犀星における芸術的退行」（『神戸女学院大学論集』第56巻第1号）参照。
- 3 三浦仁『室生犀星——詩業と鑑賞——』おうふう 2005 P34-35
- 4 俳句工房、<http://homepage3.nifty.com/a-un/za/ats.html>
- 5 室生犀星著 富岡多恵子編『室生犀星近代日本詩人選11』筑摩書房 1982 P18
- 6 前出注3 P37
- 7 鳥居邦郎「室生犀星」伊藤信吉等編『現代詩鑑賞講座4・近代詩篇Ⅲ生と生命の歌』角川書店 昭44 P152
- 8 三浦仁「『抒情小曲集』の主題と方法」佐久間保明・大橋毅彦編『佐藤春夫と室生犀星』有精堂 1992 P141
- 9 三浦仁『研究露風・犀星の抒情詩』秋山書店 昭53 P139
- 10 星野晃一『犀星句中遊泳』紅書房 平12 P325
- 11 磯村英樹『城下町金沢』講談社 昭54 p12
- 12 奥野健男「青き魚——室生犀星の詩的故郷」（『季刊芸術』昭42・10）、伊藤信吉『抒情小曲論』（青娥



書房 1969) など参照。

- 13 奥野健男編著「室生犀星入門」『室生犀星評価の変遷』三弥井書店 昭61 P23
- 14 三木サニア「室生犀星の児童文学（十）——『動物詩集』の世界——」『方位』第18号 P122、116
- 15 星野晃一『室生犀星——幽遠・哀惜の世界——』明治書院 平4 P267

(原稿受理 2010年2月26日)